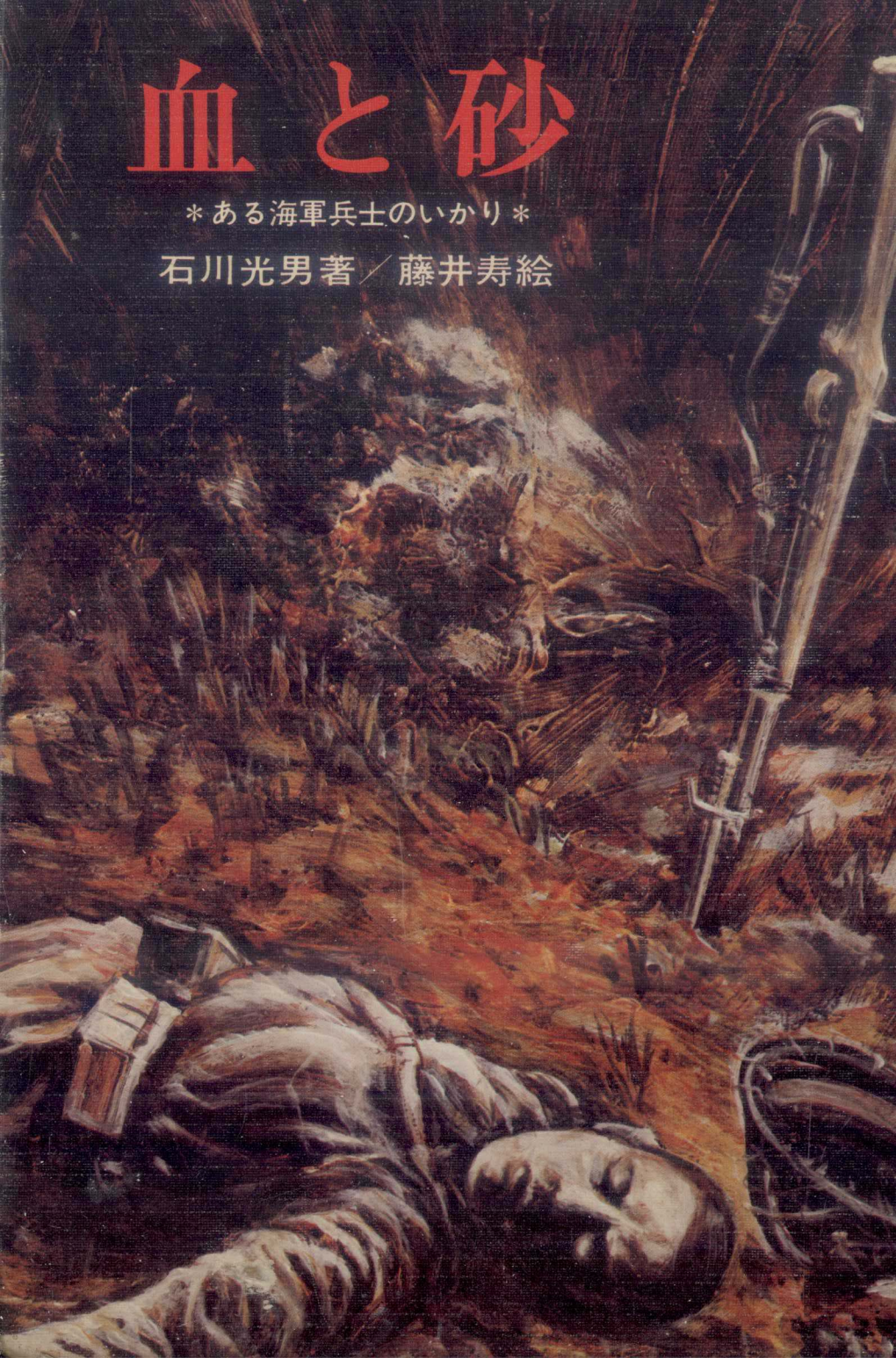


血と砂

＊ある海軍兵士のいかり＊

石川光男 著／藤井寿絵



あすなろ創作シリーズ 16

血 と 砂



1974年 初版発行

著 者／石川光男

発行者／山浦常克

発行所／株式会社 あすなろ書房
東京都新宿区弁天町107 石嶋ビル (☎162)
電話(203)3350／振替東京63084
印刷所／有限会社第二整版
製本所／有限会社山崎製本

NDC 913 石川光男 血と砂
あすなろ書房 1974 176p 21cm(あすなろ創作シリーズ16)

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はおとりかえします

血と砂

ある海軍兵士のいかり

石川光男著／藤井寿絵

血と砂・ゆくじ

第二国民兵 だいこくみんへい 6

新兵教育 しんべいきょういく 15

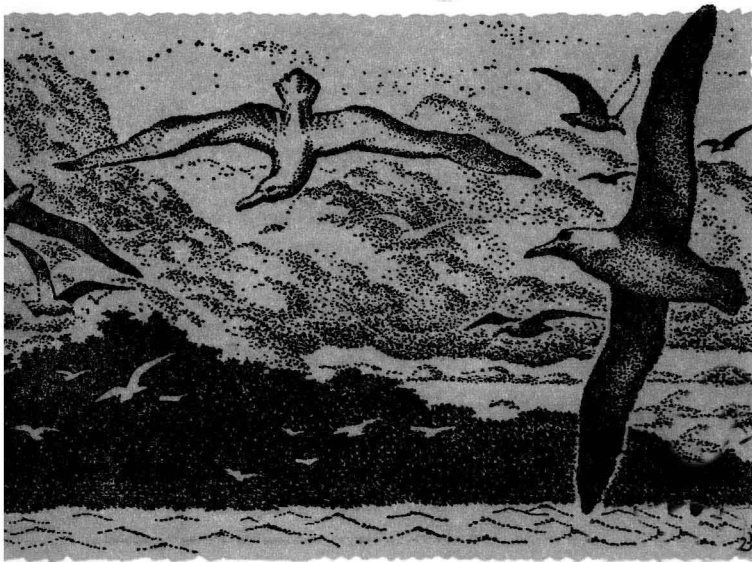
宇土一等兵曹 うどとうへいそう 24

おやじ日の丸 40

割烹「うとろ」 かつぽう 51

銀座の風 ぎんざ 63

輸送艦太東 ゆそうかんたいとう 80



内火艇

96

洞窟の病院

115

病院壕入り口

129

夜の戦場

144

あとがき



■紹介■

石川光男（いしかわ・みつお）

一九一八年、東京西大久保に生まれる。
日本大学工業学校・東京高等工科学校・立
正大学宗教科に学ぶ。製図手・編集者生活
を経て戦時中応召出征。特務艦白沙乗組員
となって東南アジアに転戦、乗艦撃沈され
てからうじて南ベトナムに上陸、終戦。海
軍二等主計兵曹。翌年日本に帰国、ふたたび
編集者生活ののち文筆業にはいる。主著
『若草色の汽船』『救命艇の少年』『戦艦
物語』『ゼロ戦と戦艦大和』『世界一の新
幹線』『カーネギー』等。

日本児童文学者協会理事・日本児童文化
団体連合委員・ジュニア・ノンフィクショ
ン作家協会役員・白沙会役員。

現住所・神奈川県相模原市東林間七一―

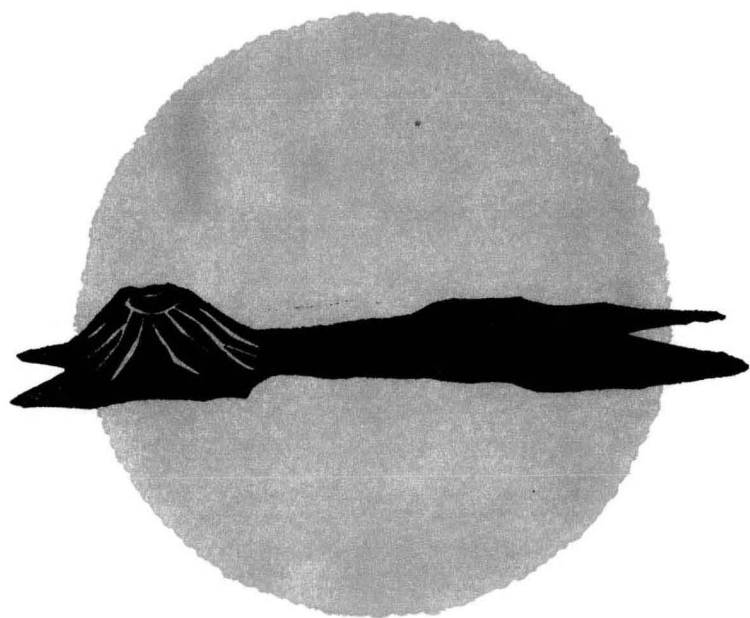
一三。

藤井 寿（ふじい・ひさし）

一九四七年、茨城県に生まれる。生後一
年で群馬県に移転、そこで育つ。県立中之
条高校卒業後上京。以後、版下、ビル清掃、
牛乳配達等の仕事をする。一九七〇年より
フリー。一九七三年より児童書のさし絵を
始める。主な作品『小学生・ノンフィクシ
ョン』（全五巻）

現住所・東京都小平市上水南町五三九。

血 と 砂



第二国民兵



志賀^{しが}洋^{よう}一^{いち}の家に、赤紙^{せきし}の、召集^{しょうしゅう}令^{れい}状^{じょう}がとどけられました。

『昭和十九年六月一日、横須賀^{よこすか}第一^{だいいち}海兵^{かいへい}団^{だん}ニ入団^{にゅうだん}スベシ。』

と書かれてありました。

母からの電話で、死^せの宣告^{せんこく}書^{しょ}にもひとしいそれがきたことを知らされ、洋一は、勤め^{つと}さきの神田^{かんだ}の出版^{しゅつぱん}社^{しゃ}を早退^{そうたい}して、家に、とんで帰りました。

「そんなばかなことがあるものか。おれは、丙種^{へいしゅ}だ。丙種^{へいしゅ}に召集^{しょうしゅう}がくるなんて。これはなにかのまちがいにちがいない。このへんにもう一軒^{けん}、志賀^{しが}という家があり、そこに洋一という人間が、もうひとり、きつといる。」

洋一のなくなった父は、わりあいおだやかな顔立ちをしていましたが、洋一は、祖父^{そふ}ににたらしく、あごが張^はっていて、まゆが太く、口が大きく、一見、こ

わい顔をしていました。洋一は、その顔を、もっとあららせて、ふんがいにたえないようにいいました。

徴兵検査のとき、甲種、第一乙種、第二乙種に査定された者は、すぐ兵隊にとられるか、あるいはあとで召集を受けるかで、いずれも直接兵役に関係がありました。丙種は、いってみれば、人間のくずで、軍隊に入隊することのない人種でした。洋一は背も高く、じょうぶそうなからだつきをしていましたが、五年まえの検査のとき、肺病気味だったので、丙種と査定されていたのです。しかしいまは、健康をとりもどしていました。

洋一は、召集令状をつかむと、さっそく近所の交番に行き、巡査に、もう一軒の志賀という家をさがしてもらいました。けれど、その交番の管轄内には、ほかに志賀という家はありませんでした。

洋一ががっかりして帰りしな、巡査は、上目づかいに、洋一をにらむようにしていいました。

「おまえ、軍隊に召集されるのが、どうやら、いやらしいな。召集令状がくれば両手をあげて大喜びに喜ぶのがほんとうだ。おまえというやつは、それを、

めいわくそうにしゃがって。」

いわれて洋一は、すぐいい返しました。

「だってぼくは丙種なんです。丙種に召集がくるってこと、あるんですか？」
「おまえ、知らなかったのか。もう一年もまえから、丙種だって、ぼつぼつ、軍隊にとられておる。戦争がこんなに大きくなったら、だれだって戦争に出なければならなくなる。おまえのようなくずが軍隊に召集されるのは、むしろ、ありがたく思え。」

いわれて洋一は思いだしました。丙種には別名、第二国民兵という名がついていました。

（なるほど、第二国民兵というのは、正規の兵隊だけでたりなくなったとき、どんなやつでも軍隊に引っぱりこむ半人前の兵隊のことか。おれはその半人前の兵隊として軍隊によびだされたのか。）

洋一は、すっかり、ゆううつになりました。

軍隊になど、絶対に行きたくありませんでした。いくら軍部が「戦争はうまくいっている。」といっている、大学を途中までいていた洋一には、人よりも

世の中を見る目があり、そうとはけっして思えませんでした。戦争の雲行きはだ
いぶあやしい。そんなあやしい状態のときに軍隊にはいつていくなんて、まるで
自殺しに行くようなものだ、と思わないわけにいきませんでした。

「どうだった。やはり、まちがいったったかい？」

家に帰ってくると、母が玄関に走り出てきて、洋一にたずねました。

「いや。まちがいではなかったようだ。これはほんとうにおれんところに来たもの
らしいよ。」

母は、一しゅん、声をのみ、それから、顔をくもらせていいました。

「そうかい。とうとうおまえにまで、きたのかい。いよいよわたしはひとりぼっ
ちになるんだね。」

洋一はこれからさき、軍隊生活のつらさと、母を気づかうつらさとの、二重の
つらさを味わうようになるのだと思いました。

洋一は、身のまわりの整理をし、会社にも三日かよって、仕事の引きつぎを全
部すませました。

四日め、最後の日、父の墓地におまいりに行って、その帰り道、墓地の近くの

理髪店にはいりました。

「頭を丸坊主にさせてくれ。」

というと、中年の床屋は、こっくり、うなずいてから、いいました。

「そうですか。お召しですか。で、陸軍ですか、海軍ですか？」

軍隊に入隊するときには、だれもみんな頭を丸坊主にしていくのがならわしになっていたからです。

「海軍だよ。」

「海軍ですか。そりゃ、そりゃ。海軍はあまりテクテク歩かなくてもすむからいいですね。でも、海軍には、海軍精神注入棒とかいう野球のバットぐらいの太さの棒があって、それで毎日全員のしりっぺたを、ドスンドスンと、ぶちあげて話ですよ。それをやられると、しりがさけて、さる、またが血でまっかになるんですって。しつけとか、鍛錬とか、海軍はそれがそうとうきびしいですよ。」

洋一は、思わず、床屋のほうをふりむきました。床屋は、それきりおしまつて、バリカンを動かしていました。



洋一は、のどが、きゅうくつになり、それをやわらげようと、あごを上むけて、のどのすじを引きのばしました。

（じょうだんじゃない。毎日棒で全員のしりつぺたをなぐるなんて、そんなばかなことがおこなわれるはずがない。それはなにかしくじりをしかしたやつが受ける罰で、ふつうに働いている者まで、そんなことをやられるわけではない。だいいち、国のために命をかけて軍隊にはいった者に、軍隊がそんなひどいことをするわけがない。）

洋一は、町会の人にたのんで、母が留守家族扶助金を受けられるようにしてもらいました。また、両どなりの家の人に病弱の母のことを、くれぐれもよくたのみました。

入隊の朝は、どんよりしたくもり空で、洋一の心を、そのまま反映しているかのようにでした。

東京駅からの横須賀線の電車は、ほとんどみんな国民兵ばかりのようで、だれもが青い緊張した顔をしていました。背のずいぶん低い男、カマキリのようにやせた男、いずれもふだんなら兵隊になれそうもない半人前の人間ばかりでした。

横須賀駅からは、何千人もが、何百メートルもつづく長い列をつくり、セーラー服の水兵の棒でおしこくられながら、かけ足で、どんどん、横須賀第一海兵団の練兵場（れんべいじやう）にかけこまされました。

海はすぐ前でしたが、練兵場（れんべいじやう）も、いく棟（むね）ものコンクリートの兵舎（へいしや）も、ひどくぼうばくとしていて殺風景（ころふうけい）で、洋一には、そこが地上にない、どこか別の世界（べつ）のよう（よう）に思われました。

身体検査（しんたいけんさ）がおこなわれ、軍務（ぐんむ）にとでもたえられそうもない虚弱者（きよじやくしや）や不具者（ふぐしや）が何百人も帰（かへ）されて、入隊者（にゅうたいしや）がはつきりきまると、軍装一式（ぐんそういつしき）に、食器（しょくき）がわたされ、各地（ち）の海軍部隊（かいぐんぶたい）に配属（はいぞく）分けされました。

毎月（毎月）どんな入隊（にゅうたい）してくる者を海兵团（かいへいだん）だけではとうてい訓練（くんれん）しきれないので、三百人、四百人ぐらいつが一団（だん）となり、新兵教育（しんべいきょういく）をさづけられるために、全国各地（かこくち）の陸戦隊（りくせんたい）・航空隊（こうくうたい）・各種学校（かくしゆがく）にまわされることになったのです。

北海道（ほつかいどう）・青森（あおもり）・宮城（みやぎ）・茨城（いばらぎ）・静岡（しずおか）・三重（みえ）、遠くは中国のシャンハイあたりまで行（い）かされる者もありましたが、洋一は、まことにしあわせにも、東京品川（しながわ）の海軍主計学校分校（しゅけいがくぶんこう）にまわされることになりました。洋一の兵科（へいか）が主計兵（しゅけいへい）だったから

で、主計兵とは、庶務や経理、それに食事をつくる仕事を受けもつ、特種任務の兵隊です。

はじめてセーラー服を着せられ、横須賀線でバックして、品川の海辺の海軍主計学校にはいりました。木造モルタルぬりの二階建ての建物が十数棟ならんでいる、軍隊らしいいかめしいところのない、ごく平凡なかまへの学校でした。洋一は、その建物を見たしゅんかん、胸の不安が、ゆっくり、消えていくのを感じました。

その夜、洋一は、兵員室の空間につったハンモックの中で、目をとじ、やわらかな気持ちで、

（おかあさん。おれ、あなたのすぐそばにいらんだよ。安心していてください。）
心でそうつぶやきました。

新兵教育



時間時間のラッパによって、規則正しく動きまわる、軍隊生活がはじまりました。

行動はすべてかけ足で、室内でも室外でも、みんな、鳥のようにとびまわりました。

せいっぱいの大声で命令され、せいっぱいの大声で返事をする。まるでだれもがけんかをしているような口のききかたです。

動作にはすべて節度が必要で、キリリと敬礼し、キリリと回れ右をする。ももを九十度上にあげ、両手を左右に大きくふって歩く。まるで機械人形のようにです。

階級制度がやかましくて、下の者は上の者を絶対にうやまわなければならな